



江北二丁目の五色堤公園内にある栽櫻記碑
 「昭代楽事」所収の栽櫻記を掲げた石碑（写真右側）。江北二丁目57番から現在地に移転。

足立史談

第399号

2001年5月15日
 足立区教育委員会
 足立史談編集局
 足立区立郷土博物館内
 〒120-0001
 東京都足立区大谷田5-20-1
 TEL 03-3620-9393
 FAX 03-5697-6562
 <13-337>

「昭代楽事」の人々

第2回 矢沢幸一郎

「栽櫻記」まではすべて漢文で綴られ、江北の人々の文化水準の高さを披露しているようである。このあと短歌・俳句と続いている。

※（ ）内は筆者注記

江北村式千式百十六間三合三勺
 西新井村壹千間
 櫻樹総数三千式百式拾五本
 左種類如
 (七八種類の名前をすべて掲げている)

- | | | |
|---|-------|---------|
| 短歌 | 錦織 瓢 | 在東京 |
| 短歌 | 藤田 信 | 在千住 |
| 短歌 二首 | 清水勇太郎 | 在千住 |
| 短歌 | 松原 新 | 千住人 |
| 短歌 | 市川 翠雪 | 江北人 |
| 短歌 二首 | 吉田 松軒 | 在江北 |
| 短歌 | 藤井 東邨 | 江北人 |
| 短歌 二首 | 瀧口 臨海 | 在江北 |
| 短歌 | 清水 江北 | 江北人 |
| 短歌 | 佐藤九十九 | 江北人 |
| 短歌 | 小宮 幾世 | 江北人 |
| 短歌 二首 | 江川 井蛙 | 江北人 |
| 短歌 | 莊 久子 | 佐藤益太郎翁妻 |
| 短歌 | 尾上 眞路 | 埼玉人 |
| 俳句前文付き(五句) | 岡田健次郎 | 埼玉人 |
| 其彭、華遊、悦子、梅子、江北(二句)、雲樵(三句)、三省、福八内、松花、積雪、祐宣、小天狗、猷甫、小石、松月、芳樹、豊詠、三省(二句)、香山、霞山、竹麿、如一、野生、笑山、狸楽、柳芳、芳笑、義詮、二徳、祐宣、梅賀、金羅 | | |

昭代楽事畢(ここまでで本文は終わる)
 昭代楽事跋 明治廿四年六月 文莊石川兼六
 昭代楽事自跋明治廿四年六月 淡如清水謙吾
 (跋文は再び漢字で、序文と同じにやや大きめの活字が使われている。さらに興味深い次の「付録」が続いている。)

自江北至西新井、堤長三千式百式拾六間三合三勺
 内

「付録」に記載されているところによれば江北村地内に二二三六本、本木村地内には一〇〇〇本が植えられたという計算になる。にもかかわらず江北村関係の人々の醸金が圧倒的であることは、「江北の桜」とも言われるのであろうか。今年もまた桜は人々の目を楽しませてくれた。

(総計金額は計算してみると合わない)
 以上が「昭代楽事」の全項目次である。
 何より注目したいのは、江北村の人々の文学作品集であるということである。
 江北文化の水準を示し、桜への思いを込めたこの一冊は、今日風に言えば「村おこし」の一大イベントでもあったと思える。かつての賑わいを伝え聞くにつけ、当時の人々の旺盛な息吹きは、やはり村長自らの活動に刺激されたからでもあるだろう。
 江北から本木まで、今では高速道路の下になっっているが、延々と桜が咲く光景を思い描くだけでも心が浮き浮きしてくる。

最後になるが貴重な本資料を保存されていた堀内邦二氏に誌上より敬意を表する次第である。(足立史談会会員)

第1回(本誌三九五号)の訂正

3頁22行目〜24行目の「ここに掲げたのは:」の1段落を次の一文に差し替えて下さい。(編集部)

(江北橋たもとの土手下の記念碑に刻まれた文章。記念碑は現在五色堤公園に移設されている。ここまですべて漢文である。)

※記念碑に刻まれているのは「栽櫻記」の文章のみである。

千葉佐那の墓

千住の千葉灸創始者

国井修一

千葉佐那は、司馬遼太郎の小説『竜馬がゆく』などにも登場し、北辰一刀流宗家・千葉周作の弟定吉の次女として生まれ、その流儀を収めつつ、子弟を育成し、明治維新史で著名な坂本龍馬の許婚者であったことで有名な人物である。

佐那の生年月日は一八三八(天保九)年三月五日。剣術の師匠という家柄からか、幼少の頃より薙刀等をよくし、十四歳で北辰一刀流免許皆伝を受けたと一般にいわれている。幕末、坂本龍馬が、父定吉の主催する桶町千葉道場(現在中央区)に入門していた頃には、龍馬と対戦したという逸話も残されている。

維新前後には、宇和島伊達家の政子姫等に武術一般を教えたと生前のインタビューで、佐那本人が語っている(山本節「坂本龍馬氏の未亡人を訪ふ」『女学雑誌』三三二号、明治二六年九月三日)。

そうした、剣術をはじめ武術一般を体得していた佐那は、その後、一八八二(明治一五年)に、千住中組土手下(旧掃部宿伯楽横丁・現足立区千住仲町)に灸を専門とする治療院「中風見分諸病灸活院」を開いた(千葉の名灸)『毎日新聞』明治三六年)。この灸活院については、本誌でも丸山宏氏によりかつて紹介され(「千住仲町二十九番地」『足立史談』二四号)、「千葉の名灸・千葉灸活院」として、佐那没後も、近年に至るまで開業がつけられ、よく知られている。千住二丁目にある慈眼寺刀自の話によれば、戦前は灸活院の外にまで並んでその効を頼ってくる人が多かったという。

佐那が開業していた当時から、中風によく効き、人気が高かったといわれている。当時そこを訪れた人に、甲府の人で、自由民権運動家として著名な小田切謙明がいた。佐那は、謙明が亡くなった時に、甲府の小田切家に行き、夫人の豊次の家政整理を手伝っており、豊次とも親しかったようだ(山本節前掲書)。その後、佐那は、千住の灸活院経営を続けていたが、一八九六(明治二九年)年一〇月一日に、同院で亡くなった。甲府市の清蓮寺に伝わっている話によれば、豊次は佐那が亡くなった時にどういふ訳か、自家の墓地内に佐那の墓を建てた。この墓が、現在、清蓮寺・小田切家墓所内にある千葉佐那の墓であり、立派な自然石で墓碑の裏に「坂本龍馬室」と彫られていることで有名である。一般的にはここに、佐那の遺骨も埋葬されているとみるむきもある。しかし、清蓮寺によれば、こ

の墓に佐那の遺骨が入っているかどうかかわらないという疑問を示しており、佐那の墓は、別にも建てられていることも考えられる。八柱霊園(千葉県松戸市)を調査していたところ、同霊園内の谷中霊園分無縁塚にある『谷中霊園合葬者名簿』に千葉佐那について、次のような記載があった。

【史料】

墓地位置表示	面積	所有者
一甲八一〇四	三三〇五	熊本庄之助

死亡年月日	埋葬月日
明治二九・一〇・十五	一〇・十九

死亡者氏名	性	埋葬方法
千葉さな	女	土

これによって、千葉佐那は、死後、一八九六(明治二九年)年一〇月一日に谷中墓地(のちに霊園)に土葬で埋葬されたこと、佐那の末妹はまの夫、熊本庄之助が墓地所有者となることがわかる。また、『谷中霊園合葬者名簿』には、一九五〇(昭和二五年)年三月三日申請、同年三月六日許可とあることから、同年に、千葉佐那の墓も八柱霊園(現在千葉県松戸市)内の谷中霊園分無縁塚に改葬・合葬されたことがわかる。

これらのことから、従来、唯一の千葉佐那の墓と思われていた甲府・清蓮寺の千葉佐那の墓とは別に、谷中墓地にも建てられ、戦後、八柱霊園に改葬・合葬されたことが明らかとなった。また、千葉佐那は死後、すぐに谷中霊園に「土葬」されていることから、甲府・清蓮寺の千葉佐那の墓には遺骨が埋葬されている可能性は少ないと思われる。むしろ、遺髪や、佐那ゆかりの品々などが納められてい

る可能性の方が高いと推測される。

このように、千葉佐那については、今まで、その遺骨が埋葬された墓所の所在すら、風説で語られてきたように思われる。坂本龍馬の許婚者とされ、有名であるためか、その逸話などは豊富であるが、墓所のこと以外にも風説で作られた話も多く、なかなか本場の事績がわかりにくい女性ではあるが、今後も彼女の事を追い続けていきたい。

【追記】 この文章をお読みの方で明治二十年代の千住仲町の地図をお持ちの方がいらっしゃいましたら、是非、足立史談会まで御連絡下さい。(足立史談会会員)

郷土博物館複写収集資料から⑧

ヤッチャバの成立年代記録

千住河原町にあったヤッチャバの成立はいつ頃であろうか。同町の稲荷神社の境内には明治39年(一九〇六年)に建立された「千住青物市場創立三百三十年祭紀年碑」がある。この碑文の三三〇年を単純に逆算すると青物市場すなわちヤッチャバは天正4年(一五七六年)に開設されたこととなる。ところで、この碑文の年代を裏付ける文献資料の検討は進んでいないのが現状である。そこで研究を進める契機として、今回はヤッチャバの成立を物語る資料を紹介する。

千住の故福島憲太郎氏は、ヤッチャバの資料を精力的に収集された先学であり、本コーナーでもお馴染み。氏の収集資料のうち『千住青物市場規約簿他』と題された簿冊がある。この簿冊は計二八点の文書が収録されている。幸いなことに、その中に青物市場の成立について触れた文書がある。

■資料 明治30年(一八九七年)3月 市場
継続願認可書(写) 所収「食品市場設立ノ事
由」より

(一) 食品市場設立ノ事由

一、抑々当市場設立ノ端緒ヲ尋ヌルニ、往
昔、^(一八七二年)天正年間、千住・荒川ノ如キ尚ホ渡
船ニテ往来セシ頃ヨリ萌芽シ、江戸市中
ノ繁栄ニ赴クニ伴ヒ、当所モ亦人家漸ク
稠密トナリ、^(一八八九年)文禄年間始メテ荒川架橋セ
ラレタル頃ニハ、既ニ蔬菜市場ノ開設ア
リタリ。^(一八八九年)慶長・元和ノ間ニ至リ、創テ河
原町ト称シ、市場公許ヲ得、爾来、軒ヲ
連ネ、業ヲ営ミ、年ヲ逐ヒテ隆盛ト相成
本郡ヲ始トシ、上総・下総・常陸等、沿
道各地ヨリ輸送ノ蔬菜・果物及乾物等、
市場ニ輻輳シ、旧記及故老ノ説ニ徴スル
ニ徳川時代式百有余年間、当市場ハ、商
業冥加金トシテ御用品調達ノ命ヲ蒙リ、
其ノ御用損ト称シ、毎年莫大ナル損失ヲ
負担シ来レリト云フ。明治維新以来、地
利宜シキヲ得、交通至便ナルニヨリ、当
市場ニ於テ取扱フ商品ノ数量ハ、他の同
業市場ニ冠絶ス。
^(一八八九年)明治二年小菅県庁ノ御免許ヲ受ケ、其後
^(一八八九年)明治拾二年壹月二十九日、東京府庁ノ御
聴許ヲ蒙リ、以テ現今ニ至レリ。
天正・文禄以来、今ニ至ルマテ星霜ヲ経ル
コト大凡參百有余年、連綿市場ノ名称フ。
御免許有之候当市場ノ来歴、上述ノ如シ、
依而今般食品市場取締規則御発令ニ就テ
ハ、食品市場トシテ、御認可ヲ蒙リ度、
請願仕候義ニ御座候。
(以上)

◆◇◆ あだちの稲作 (2) ◆◇◆

— 畦塗り・肥蒔き —

萩原ちとせ

あだち田んぼくらぶでは、用水路の通水に先だって4月15日に畦塗りの作業を行いました。田んぼくらぶではスコップも使い、畦を塗るといふより土を盛り上げたといった感じでしたが、本来は鍬の背で田泥を押しつけるようにして文字通り丁寧に畦を塗ります。こうして畦の補修をし水漏れを防ぐのです。

平坦に見える水田地帯でも微妙な高低があり、それぞれの田に順番に用水が届くようになっています。田と田がつながっている場合、下方の畦にその田の持ち主の所有権(管理義務)があります。他人の畦を大切にして壊さないようにすることはもちろん、自分の畦はしっかり管理する必要があります。

足立区周辺地域ではあまりないようですが、山間部のいわゆる棚田などでは畦に大豆を蒔く畦豆作りが熱心に行われました。こうした畦豆を集めると、その家で使う一年分の味噌をまかなえるほどの量になったといい、畦は作付け地としても重要な場所となっていました。

水田の元肥として、足立区周辺は下肥を使いました。下肥は農家が日を決めて台東区、江東区、あるいは千住などの町場の家へ汲み取りに行きましたが、その他おわい船が大量に輸送する場合もありました。町場の下肥は近郊農村の農業肥料としてうまくリサイクルされていたのです。田んぼくらぶの水田のある流山市北小屋では、江戸川を上ってきたおわい船の下肥を利用していたそうです。

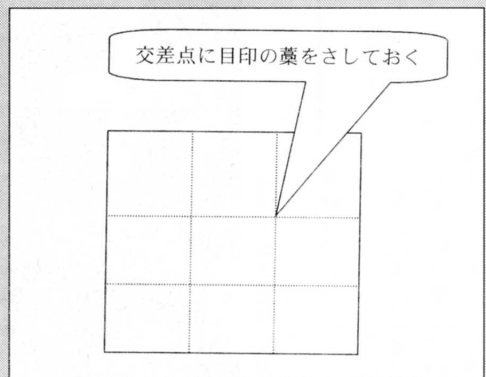
田に下肥を蒔くに先立って、セマを切るという仕事が行われます。これは、田を歩幅で計って升目状に区切り、目印として藁をさす作業です。広い田に目安なしで下肥を蒔くと、肥料の厚いところ薄いところができてしまいます。田をいくつか区切りそこに肥桶で何荷入れるかを決めることによって、下肥の蒔きムラをなくすのが目的です。

畑に接する田は肥料分が濃いと田によって地力に差があり、こうした土地の個々の状態に応じてセマの切り方は変える必要があります。そのためこの仕事は土地を熟知したその家の主人が行うことが一般的でした。

田んぼくらぶでは、元肥としてEMボカシを使いました。これは生ゴミなどをボカシ菌で発酵させたものです。新しいリサイクル有機肥料として注目されているものです。(当館学芸員)



▲ 4月15日に行った「畦塗り」(くろぬり)風景
畦塗り作業に見えますか?



▲ セマ切りの概念図

■資料上に見える成立年代 この文書は表題にあるように明治30年(一八九七年)食品市場に関する新たな法律の施行に伴って、食品市場の認可を受けるため作成された。作成者は南足立郡千住青物市場組合総代で末尾に言名の連印が捺されている。提出先は警視総監で、請願は同年三月三十日に認可された。

さて、肝心のヤッチャバこと青物市場の成立年代だが、文面を見ると天正年間には市場の前身が生まれており(問屋?)、文禄年間には蔬菜市場が誕生、慶長から元和の頃には市場設立の「公許」を得たと記している。年代はいずれも江戸時代の初め頃で一六世紀末〜一七世紀初頭となる。

ところが、この資料が入っている簿冊の、他の文書には「元禄年間問屋所ニ青物市場御免ノ当時ヨリ、数代連綿トシテ、此営業ヲ相続シ」という文言がある(「千住青物市場 蓮根・慈姑問屋特約」)。こちらの文書を信頼すれば青物市場設置許可は、前出の慶長・元和年間から約九〇年新しい一八世紀の初頭となる。

足立川柳

野谷竹路 選

申告を終えて安堵の浅い春
春風が心に重い花粉症
少年の昔と今をつい比べ
名工のこけし並べて旅が好き
パソコンへ老いの回路が若返り
アイドルの賞味期限を売り急ぐ
負けん気が縁遠くする適齢期
六法の死角で策を練ってみる
たけなわの宴を酒乱が白けさせ
長すぎる挨拶司会に叱られる

祝子
はじめ
ひろ枝
きく子
さと子
成近
英一
健司
たろう

ここまで掲げた資料はいずれも明治に入ってからのものであるが、千住のヤッチャバについては、他の場所でも記録が見出せる。

著名な江戸時代の文政5年(一八二三年)成立の幕府編さんによる「新編武蔵風土記」では次のように記されている。

…宿並間数千二百五十八間。其左右ニ旅亭・商家軒ヲナラベテ旅人絶ルコトナク、尤賑ハヘリ。享保ノ頃ヨリ毎朝市ヲタテ、五穀・野菜ヲヒサクモノ日ニ盛ナリ。故ニ明和年中ヨリ各其問屋ヲ立テ税ヲ斂ム。…

この記述によると享保年間に市がはじまり、一八世紀も半ばの明和年間にいたって市場としての納税を行う公式な市場となったということになる。

今ひとつ成立年の参考となる資料がある。明治の東京府が記録した千住組魚問屋に関する資料である(「東京諸問屋沿革誌巻二」、東京都公文書館蔵。『江戸東京問屋史料 諸問屋沿革誌』、一九九五年、所収)

…略…
一、寛永八年辛未年、当時同業者八名ヨリ冥加ノ為メ毎歳七月十五六日幕府へ川魚鯉鮒ヲ献納ス、

本資料によると川魚問屋は寛永八年という一七世紀前半には冥加金を上納して川魚問屋となっていたということになる。

このように資料上に見える成立年代は実に様々である。信憑性という点に限って考えてみても、同時代資料を優先すれば、「新編武蔵風土記」の享保年間説が信用度が高いし、資料の性格(実用文書か記録類かという点など)から見た場合は、今回掲出した故福島氏の収集資料が信憑性が高くなる。しかも、福島氏の収集資料でも、年代に異同があるといっ

た具合である。

謎の成立年代

このように諸記録に異同があり、ヤッチャバの成立年代はなかなか確定できない。前ページの明治30年の資料は「旧記及故老ノ説ニ徴スルニ」と、記録類や年輩者への聞き取り調査を行った上で年代を記している上に、34人の問屋衆の署名連印があることから、当時の共通認識となっていたと考えられるものの、同年代に作成され、性格もほぼ同じ「蓮根・慈姑問屋特約」では異なる年代が記されている。

御存知のように昭和20年(一九四五年)の空襲で、千住河原町一帯は大ダメージを受けた。多くの資料が焼失しており、新規の資料発掘は困難と考えられる。

読者諸賢は、世に名高い千住のヤッチャバが、いつ頃成立したとお考えであろうか。江戸時代から栄えていたことは確かであるが、その成立年代は謎に包まれている。よく歴史を語るとき、何年に成立したと述べて伝統を語るが、ヤッチャバについては斯様に難しい。

市場と宿場は、千住の二大特徴である。宿場としての成立は、様々な資料から寛永2年(一六二五年)が一つの画期となっていることは明らかであるが、市場については未解明。これを解決するには多くの人の検証と研究が必要である。諸賢の御説をぜひともお寄せいただきたい。

前世紀写真館No.4 舎人の街並み

一九六〇年代当時の赤山道沿いの舎人の風景。現在では見られなくなった茅葺き屋根が並んでいた。



(撮影・写真提供 石坂 満)

雑記

▼好評をいただいている塚田博「戦国武将宮城氏と足立」は紙幅の都合で次号までお待ち下さい。▼千住の市場は、いったい何時頃成立したのか? 議論が必要。ぜひ御智恵をお寄せ下さい。(編)

(編集部)